

日本音楽学会第69回全国大会 プログラム

大会第1日 11月3日(土)

9:00～	受付開始 桐朋学園大学調布キャンパス1号館入り口			
9:40～9:45	開会の辞 地下008教室			
	Session A (地下017教室) 司会：上尾信也	Session B (地下013教室) 司会：川本聡胤	Session C (地下001教室) 司会：伊東信宏	Session D (地下008教室) 司会：稲田隆之
9:50～10:25	A-1 竹内茂夫 旧約聖書におけるリユートを表す語とその存在の有無について	B-1 中田朱美 ソ連時代のポリショイ劇場におけるソヴィエト・オペラ——上演記録の解析を通じて——	C-1 筒井はる香 山名敏之 ロマン派のフォルテピアノのハンマーヘッドについての研究の現状と課題——革の変革とフェルト化——	D-1 畑野小百合 19世紀末のベルリンの音楽生活におけるヘルマン・ヴォルフによる演奏会プログラム制作——その前提・目的・作品受容との関係についての考察——
10:30～11:05	A-2 吉川 文 中世音楽理論における音名——理論書の図表に示される音組織と音関係——	B-2 一柳富美子 再考——ロシア国民楽派とポスト国民楽派——	C-2 鷺野彰子 ロマン派的演奏と近代的演奏の分岐点に位置するヨーゼフ・ホフマン	D-2 梅林郁子 R. マイレーターの書簡にみるH. ヴォルフのオペラ《お代官様》——O. グローエ宛 1895年と1896年の書簡より——
11:10～11:45	A-3 井上果歩 ケルンのフランコ『計量音楽技法』再考——現存6写本の比較を通して——	B-3 大高誠二 アクセントとタクト——18世紀のドイツの理論を中心に——	C-3 神保夏子 国際音楽コンクール世界連盟の成立とその初期の活動(1956～69)——「国際性」と「公正性」の確立をめぐる——	D-3 釘宮貴子 20世紀初期ウィーンにおける日本詩の翻訳と歌曲——ハンス・バトゲ『日本の春』とエゴン・ヴェレス《桜の花の歌》Op. 8——
11:50～12:25	A-4 宮崎晴代 中世のソルミゼーション・シラブルの成立過程について——「tri, pro, de, nos, te, ad」と「an, chi, tho, gen, mi, lux」——	B-4 西田絃子 ネオ・リーマン理論のリーマン受容にみる概念変容——「進行／転換」と「PLR変形」を中心に——	C-4 山上揚平 今日における伝統的桌上ゲームのサウンドデザインの可能性についての一考察——ビデオゲーム化された古典ゲームの音響分析を通して——	D-4 岡田安樹浩 ワーグナー《神々の黄昏》初演パート譜の再発見
12:25～13:25	昼休み			
	Session E (地下017教室) 司会：津上英輔	Session F (地下013教室) 司会：武石みどり	Session G (地下001教室) 司会：伊東辰彦	パネル (地下008教室) 13:25～15:25
13:25～14:00	E-1 中島康光 二重対位法の実践——ツァルリーノ「和声概論」の周辺——	F-1 奥中康人 明治前期の陸軍ラップ譜について——3点の楽譜集の分析——	G-1 安田和信 W. A. モーツァルトのシンフォニー短調(K. 550)の第4楽章における特異性——主要主題の形式を中心に——	《時の終わりのための四重奏曲》——未公開資料集によって開かれるオリヴィエ・メシアンへの新たな眼差し パネリスト 藤田 茂 Yves Balmer コメンテーター 沼野雄司 福中冬子
14:05～14:40	E-2 長岡 英 G. アニムツチャの5声モテット集第1巻(1552)——「トータル・タイプ」による旋法分析——	F-2 鈴木絢子 明治時代の日本におけるローベルト・シューマンの受容——音楽取調掛及び東京音楽学校を中心に——	G-2 池上健一郎 ヨーゼフ・ハイドンの後期作品における変奏反復のストラテジー	
14:45～15:20	E-3 砂川巴奈歌 ベニーニュ・ド・パシイの『歌唱法』における装飾法と音節の「長短」の関係	F-3 白井史人 日本における「トオキ音楽」批評の成立と展開——翻訳記事と樹下慶吉の批評活動の役割——	G-3 西川尚生 W. A. モーツァルト《クラヴィア協奏曲ニ長調》K. 175+382の史料伝承と楽譜テキスト	
15:25～16:00	E-4 初山陽子 ヘンデルの《陽気の人、ふさぎの人、温和な人》の歌詞付けと歌詞の発音——ジョン・ミルトン作品の翻案という視点から——	F-4 白石朝子 近代日本のレクチャー・コンサート導入に関する考察——講演者アンリ・ジル＝マルシェックスのレクチャー・コンサート、その内容と意義——	G-4 高松佑介 フランツ・シューベルトの交響曲におけるメヌエットおよびスケルツォ楽章の書法の変遷	
16:15～18:00	総会 地下008教室			
19:00～21:00	情報交換会 調布クレストンホテル 8階クラウンルーム(調布PARCO上 北側ロータリーに面したバルコ正面入り口からお入りください)			

大会第2日 11月4日(日)

9:00～ 受付開始 桐朋学園大学調布キャンパス1号館入り口				
	Session H (地下017教室) 司会：齋藤 桂	Session I (地下013教室) 司会：福中冬子	Session J (地下001教室) 司会：長木誠司	Session K (地下008教室) 司会：沼口 隆
9:50～10:25	H-1 齊藤紀子 駒井静江のピアノの稽古 ——女学校出身者の趣味・教養としてのピアノの実践——	I-1 坂本光太 ヴィンコ・グロボカール、《レス・アス・エクス・アンス・ビレ》と《エシャングジュ》における、新たな「演奏する主体」	J-1 藤村晶子 ラジオという思想 ——ラジオ・フランクフルトとバーデン・バーデン現代音楽祭——	K-1 西原 稔 18世紀後半のオーストリアにおける検閲と音楽
10:30～11:05	H-2 松村 晶 戸野本昌平 樺保三郎と九大フィルハーモニー会が遺した楽譜 ——大正期における福岡での洋楽黎明と大阪での羽衣管弦団の活動に関する考察——	I-2 東川 愛 P. プーレーズ《力のための詩》(1958) ——ミュージック・コンクレートからミクスト音楽への変遷と音響モンタージュの分析——	J-2 中村伸子 コルンゴルト《死の都》二都市同時初演前史 ——作曲家父子、出版社、劇場間の書簡を中心に——	K-2 三島 理 メンデルスゾーンが少年期にツェルターに指導され作曲した習作の変奏曲 ——J.S. バッハの伝統の適用——
11:10～11:45	H-3 七條めぐみ 俘虜が伝えた「西洋」 ——大正時代の名古屋におけるドイツ兵俘虜の音楽活動——	I-3 樋口鉄平 《レシタシオン》における意味の剥奪と再構成 ——アベルギスのケーゲ受容の系譜学的考察——	J-3 阿久津三香子 A. シューンベルクのオペラ《モーゼとアロン》における合唱の定旋律とモチーフの相互関連 ——2つのスケッチの照合を通して——	K-3 小場瀬純子 シューマンの《幻想小曲集》作品12とE. T. A. ホフマンの『カロ風幻想作品集』の超テキストの関係
11:50～12:25	H-4 西村 理 JOBKの音楽番組におけるヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団 ——大阪の音楽文化における役割——	I-4 曹 有敬 音楽におけるコラージュ再考 ——1970年代のデームリング、クナイフ、リゲティのコラージュ論を中心に——	J-4 今野哲也 楽曲分析に基づくA. ベルク《高貴なアサン將軍婦人の嘆きの歌》Op. 8の真作性の検証 ——初期歌曲に見られる和声語法の考察を中心に——	K-4 木内麻理子 ペルリオーズの《レクイエム》(1837) ——展開の原則と形式的ナラティブ——
12:25～13:25	昼休み			
	Session L (地下017教室) 司会：ヘルマン・ゴチェフスキ	Session M (地下013教室) 司会：柿沼敏江	Session N (地下001教室) 司会：友利 修	Session O (地下008教室) 司会：今谷和徳
13:25～14:00	L-1 仲辻真帆 1940～50年代における柴田南雄の音楽活動 ——創作、教育、啓蒙の各観点から——	M-1 池原 舞 アンタイルの構成美学 ——《ジャズ・シンフォニー》と《パレエ・メカニック》を中心に——	N-1 大迫知佳子 19世紀中期ベルギーの音楽思想におけるゲルマン的なものへのまなざし	O-1 富田 庸 J. C. アルトニコルの筆写譜研究から明らかにされるJ. S. バッハの作品の隠れた一面
14:05～14:40	L-2 川崎瑞穂 伊那谷と木曾谷の芸能と音楽 ——屋台獅子で辿る地域間交流——	M-2 小島広之 E. クレネクの《影の上を跳ぶ》におけるジャズ ——ジャズ導入の思想的背景、作劇におけるジャズの役割——	N-2 CHEONG, Wai Ling Nietzsche and the Musical Rendition of Greek Rhythm in Theoretical Writings by Fétis, Gevaert, Laloy, Emmanuel, and Messiaen	O-2 松橋輝子 ハラー時代のトーマス教会におけるゼレンカ作品の演奏実態 ——自筆譜とハラー筆写譜の比較分析を通して——
14:45～15:20	L-3 山本宗由 南葵音楽文庫研究 ——音楽資料分類法の分析——	M-3 藤嶋 保 エルンスト・クレネクのオペラ《金羊裘》における「不条理」の作劇術	N-3 林 直樹 カミーユ・ブノワの批評「ガブリエル・フォーレの《レクイエムのミサ》」を読む ——19世紀末パリにおけるレクイエムの評価の再検討——	O-3 新林一雄 楽師長ジャン＝パティスト・ヴォリュエミエの時代(1709～1728)におけるドレスデン宮廷楽団 ——ヨハン・ゼバ스티アン・バッハが求めた楽団との共通点——
15:25～16:00	L-4 田中 涼 山田耕柝の日本語歌曲における歌詞の音声的要素と旋律の音楽的要素との関係について ——〈燕〉、〈唄〉、〈からたちの花〉の比較分析——	M-4 今井千絵 カール・シマノフスキ作曲『仮面劇』op. 34における内容解釈 ——ミュージカル・エクフラシスの視点から——	N-4 上田泰史 パリ国立音楽院ピアノ科教授ジョゼフ・ヰイメルマン(1785～1853)の退任をめぐって ——同音楽院の内部史料から見るその背景——	O-4 米田かおり ザクセン選帝侯宮廷における巡業オペラ一座の活動 ——ミンゴッティー一座の活動を例に——
16:05～16:10	閉会の挨拶 地下008教室			